安来市埋蔵文化財調査報告書第37集

永源寺要害・宮谷１号墳

平成11年度復旧治山事業（上吉田）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

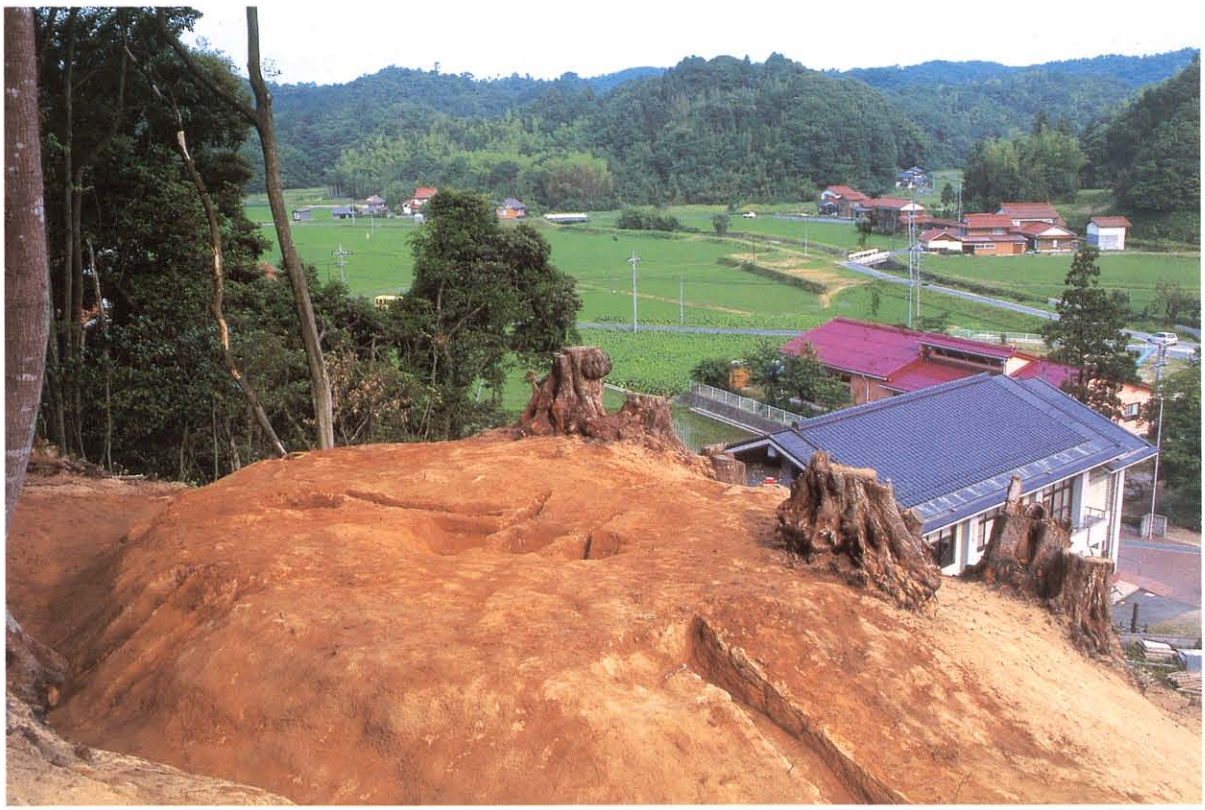
2001年3月

島根県松江農林振興センター
安来市教育委員会

安来市埋蔵文化財調査報告書第37集

永源寺要害・宮谷１号墳

平成11年度復旧治山事業（上吉田）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



例　　言

1．本書は、島根県松江農林振興センターの委託をうけて、復旧治山事業（上吉田）に伴い安来市教育委員会が平成12年度に実施した発掘調査報告書である。

2．本書で扱う遺跡は次のとおりである。

永源寺要害・宮谷１号墳

3．調査組織は次のとおりである。（敬称略）

委 託 者	島根県松江農林振興センター　所長　濱浦敏明
受 託 者	安来市長　島田二郎
調査主体	安来市教育委員会
事 務 局	市川博史（安来市教育委員会　教育長）
	前田敏巳（安来市教育委員会　文化振興課長）、武上　巧（同文化係長）
調査指導	今岡　稔
調 査 員	大塚　充（文化係主事）、水口晶郎（同）
内務整理	泉あかね

4．現地調査及び資料整理については上記の調査指導の他、大谷晃二氏（松江北高校教諭）、門脇等玄氏（安来市文化財保護委員）、東森市良氏（同）、中尾清治氏（同）、吉田公民館をはじめ関係諸機関に多大なご指導・ご協力をいただいた。

5．本調査に伴う遺物・実測図・写真は安来市教育委員会で保管している。

6．本書で使用した遺構略号は次のとおりである。

ＳＸ（不明遺構）

7．本書の挿図の方位は、国土調査法による第Ⅲ座標の軸方位である。

8．図面・遺物の整理は安来市教育委員会で行い、本書の編集執筆は大塚が行った。

目　　次

第１章　調査に至る経緯と経過 …… 1
第２章　位置と環境 …… 2
第３章　調査の概要 …… 4
　永源寺要害 …… 4
　宮谷１号墳 …… 8
　その他の遺構 …… １０
第４章　ま　と　め …… １５
図　　版
報告書抄録

挿　図　目　次

第１図　遺跡の位置 …… 2
第２図　周辺の遺跡（1:20,000） …… 3
第３図　調査区配置図（1:300） …… 5
第４図　永源寺要害調査後測量図（1:200） …… 6
第５図　永源寺要害ピット実測図（1:30） …… 6
第６図　永源寺要害・宮谷１号墳セクション実測図（1:60） …… 7
第７図　宮谷１号墳調査後測量図（1:200） …… 8
第８図　宮谷１号墳主体部実測図（1:30） …… 9
第９図　宮谷１号墳周溝内出土遺物実測図（1:3） …… 9
第10図　宮谷１号墳盛土除去後測量図（1:200） …… １０
第11図　加工段１・２実測図（1:60） …… １１
第12図　ＳＸ０１実測図（1:60） …… １２
第13図　宮谷１号墳墳丘盛土中出土遺物実測図（1:3） …… １３

第１章　調査に至る経緯と経過

本遺跡は、平成11年度に計画された島根県松江農林振興センターによる復旧治山事業に伴い発掘調査を行った。事業に伴う伐採が行われ張梁が設置された時点で、事業区域内に古墳が所在するとの通報をうけ、安来市教育委員会は平成11年12月14日現地の確認を行った。この結果、古墳が存在することが確認でき、また事業区域が古墳の南側半分にかかっていることが分かった。そのため、早急に事業主体である島根県松江農林振興センター森林整備課と協議を行い、平成12年３月27日事業の繰り越しと平成12年度に発掘調査を行う旨、協定を結んだ。

また、島根県城館跡調査員今岡稔氏の分布調査により丘陵尾根上はいくつかの縄張りらしきものが確認でき、山城跡である可能性も大きく、この時点でふたつの遺構面をもつ遺跡であることが想定された。

現地での調査は、平成12年４月11日より測量を行い、その後４月15日より本格的な発掘調査にはいった。表土層を除去すると、地山面の現れた部分があり、大きな平坦面が現れ、この面が要害面と判断した。しかし、これに伴うと思われる遺物は検出できず、ピットが一基確認できたものの要害の遺構面に確実に伴うものとは判断できなかった。このため、測量を行いこの遺構面の調査は終了した。

この後、古墳の築成状況及び遺構の前後関係を明らかにするため東西南北にサブトレンチを掘削した。この結果、古墳の北側は地山を大きく削り込んだ周溝が存在することが分かった。また南側半分は盛土によって成形されていることも確認できた。そして、東側・南側のトレンチからは、平坦面らしき部分が確認できたため古墳遺構面の下に、もうひとつ遺構面がある可能性が大きくなった。だが、この遺構面の精査は、盛土除去後に行うこととし、まず、古墳に伴う周溝及び主体部の検出を行った。主体部は地山成形部分と盛土部分にまたがっており、プランでの確認は困難を極めた。このため地山層で確認できたプランに立ち割を入れ、セクションによって確認を行った。このため、かなり不整形な検出面となったが、一段の掘り込みの墓壙が確認できた。周溝は大きく弧を描いており、これによりこの古墳が円墳であることが分かった。盛土層の検討を行いながら、南側半分の遺構面の検出を行い最終的には、東西約10ｍ・南北約８ｍの楕円形の円墳であることが確認できた。

そして、最後に古墳の盛土層を除去したところ、盛土の中から多くの弥生土器と盛土の下からは加工段が現れた。この遺構に伴った石列も検出できたが、性格は不明である。しかし、加工段の存在や盛土中に多く含まれた弥生土器などから、古墳築造前にはこの丘陵上に弥生時代の住居跡が点在する可能性が想像できた。

当初想定した遺構面より、一つ多くの遺構面が確認されたことにより、若干の期間の延長があったが、以上のような成果をもって現地での調査を終了した。

第2章　位置と環境

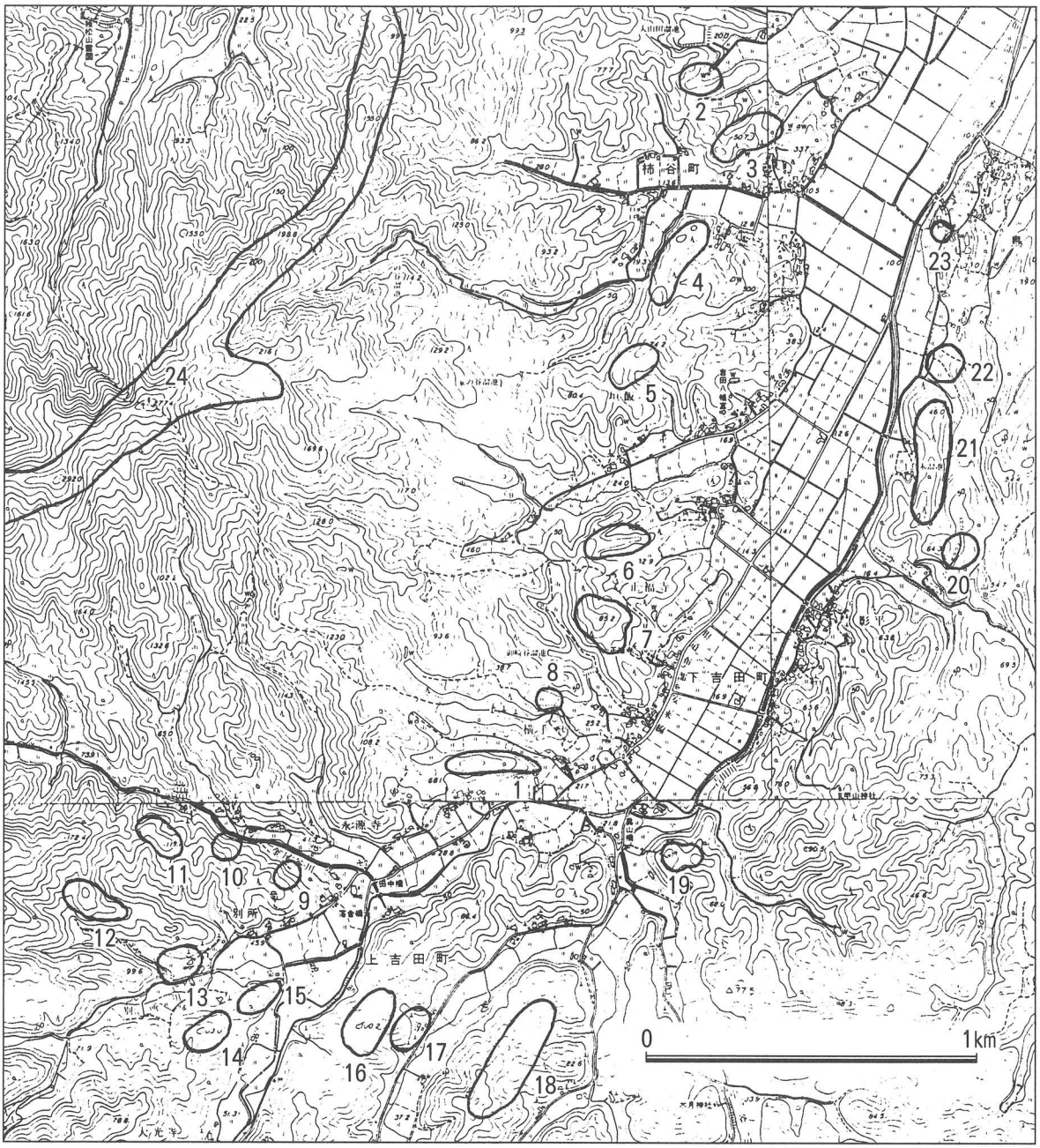
安来市上吉田町は安来市の南端に位置し、能義郡広瀬町・伯太町との境界に位置する。安来市内で最も急峻な山系に囲まれており、これらの山系は中国山地から派生する支脈の末端部分にあたると同時に、安来市内を南北に、蛇行しながら流れる吉田川の最上流部である。本遺跡の所在する上吉田町永源寺付近は、この川のいくつかの支流が合流する地点にあり、吉田川によって形成される大きな谷の南端にあたる。この谷はそのまま安来平野へと続くが、これより上流部では支流によって形成された狭隘な谷が枝分かれし、それぞれに散居形態の集落が形成される。このため、まとまった形で集落が形成されるのは永源寺付近までである。こうした地理的条件から本遺跡の周辺は安来平野の最深部にあると言うことができる。

歴史的には、出雲国風土記に山国郷として登場する場所にあたる。郷庁・正倉が置かれており古くから開けた土地であったと考えられる。沖積平野である安来平野は、当時まだそれほどの広さをもっておらず、吉田川によって形成される谷が安来の中でも比較的大きな生産基盤になっていたことが想像できる。また、風土記の中には、山国郷に新造院があったことが記されており、この寺院の瓦を作ったとされる窯跡の存在も明らかとなっている。発掘調査例が少なく、それ以前の古墳時代・弥生時代のことについては、はっきりと分かっていないが、谷を挟む丘陵上に点在する古墳群や、少し下流の鳥木横穴墓の石棺や大刀などの副葬品は、上古から有力な勢力が存在したことを想像させるものである。

中世には、吉田庄という荘園が置かれ、鎌倉・室町期、南北朝の動乱期を経て戦国期に至る。この周辺は、戦国期に尼子氏の補給ルート上に位置するため、毛利氏との抗争時には戦略上重要な場所となり、吉田八塞と呼ばれるほど多くの城郭が築かれている。このあたりの経緯については次章で詳述したいが、いずれにせよこの時代、尼子氏の本拠地である月山富田城と非常に密接な関係を持つ場所であったといえる。

以上が、本遺跡周辺の地理的・歴史的概略である。

第１図　遺跡の位置



第２図　周辺の遺跡（１：20,000）

周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	種別	概要	番号	遺跡名	種別	概要
1	永源寺要害・宮谷古墳群	城跡・古墳群	山城、古墳11基	13	宮神坊遺跡	散布地	弥生土器（安来市指定文化財）
				14	松前古墳群	古墳群	円墳７基
2	ガランサ遺跡	散布地	弥生土器、直径8.5m円墳か	15	松崎要害	城跡	山城
3	うるしめん古墳群	古墳群	円墳２基、方墳１基	16	田中要害山城跡	城跡	山城
4	かなら古墳群	古墳群	円墳４基、方墳１基 前方後円墳１基	17	五反田遺跡	散布地	須恵器
				18	バクヤシキ古墳群	古墳群	22m・19mの前方後円墳 円墳７基
5	山ノ神土壙墓群	弥生土光墓	箱式石棺				
6	後谷古墳群	古墳群		19	川手要害山城跡	城跡	山城跡
7	正福寺城塞群	城跡	山城	20	十善遺跡	散布地	分銅型土製品、弥生土
8	横手遺跡	住居跡	竪穴住居跡	21	御立山古墳群	古墳群	円墳３基、方墳５基
9	山国郷新造院	寺院跡	推定地	22	鳥木ガランサン遺跡	散布地	布目瓦
10	山国郷新造院窯跡	窯跡	瓦窯跡	23	鳥木横穴	横穴墓	銀装圭頭大刀他、家形石棺
11	菖浦谷古墳群	古墳群	円墳２基、住居跡	24	独松山城塞群	城跡	山城
12	宮神坊古墳群	古墳群	円墳				

第3章　調査の概要

永源寺要害

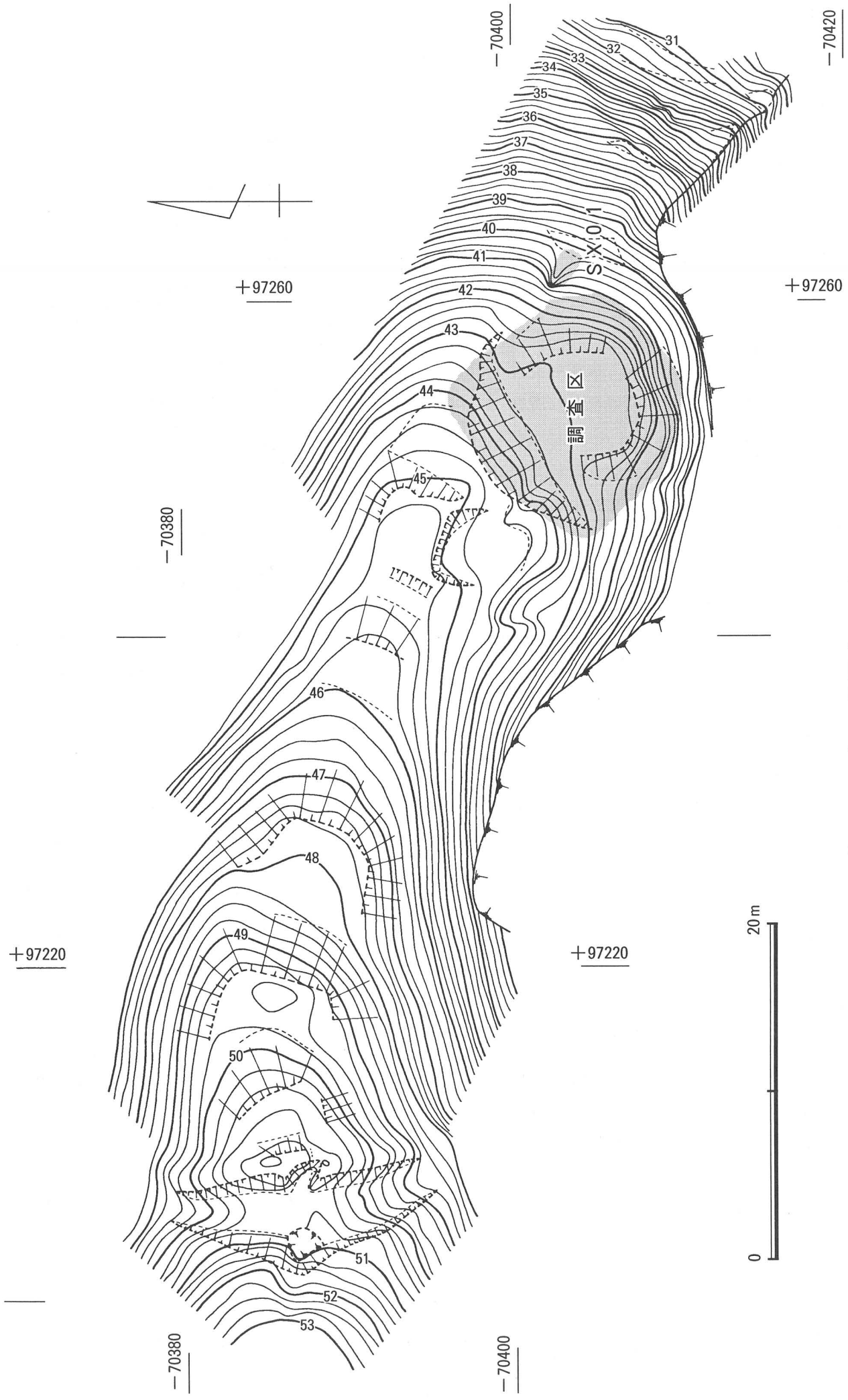
この遺構の概要を述べる前に、永源寺要害が機能していたと思われる時代背景と、その時代の本遺跡周辺の状況についてふれておきたい。

15世紀後半戦国大名として、広瀬を拠点とし出雲国を掌握した尼子経久は、中国地方全域にわたって勢力を拡大し、一時は播磨にまで遠征するほどの強大な力をもっていた。しかし、その孫晴久の時代になると、在地の国人や土豪などの連合勢力の上に立つという領主権の基盤の弱さを露呈し、新宮党事件などにより徐々に勢力を弱めていく。こうした中、山陽から台頭し中国一円に勢力を拡大していった毛利氏と対立を深めることとなる。石見銀山の攻略など徐々に尼子氏を追いつめた毛利氏は、永禄９年（1566年）ついに月山富田城にまで侵攻する。このような尼子氏最末期の段階で築かれたのが吉田に点在する城郭であると考えられる。吉田八塞[(1)]ともよばれ、この時代、吉田を舞台とした月山富田城を巡っての尼子氏と毛利氏の大きな緊張関係があったことが想定される。

尼子氏の本拠地である月山富田城は、独立した山塊の頂きに築かれた城郭ではなく富田城の背後に屏風のように連なる独松山の山塊と尾根伝いに連絡が可能である。安来市吉田地区はこの独松山山塊の出口に位置し、富田城の裏玄関とも呼べる位置にある。毛利氏の富田城攻略の際には、独松山の山塊上に向城を築かれる危険性があり、こうしたことからも尼子氏にとって戦略上確保しておかなければならない重要な場所であった。

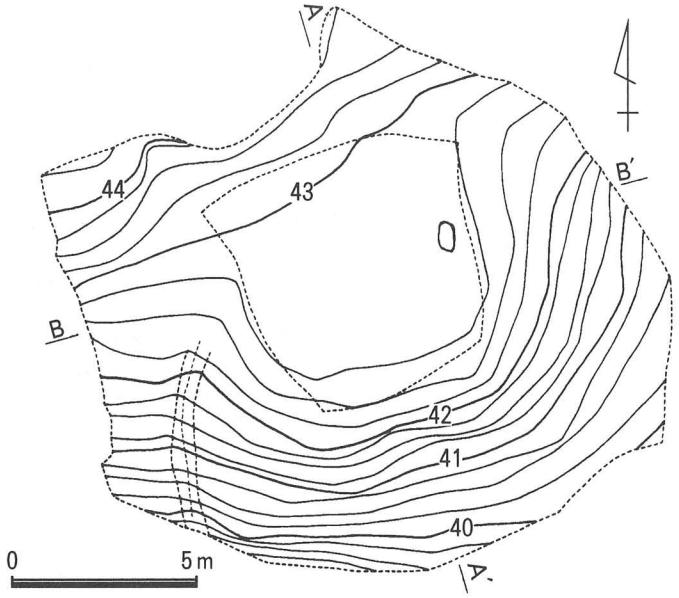
また、位置と環境でも若干ふれたが、吉田は月山富田城の補給線上にも位置している。尼子氏は、日本海方面と美作国～伯耆国方面からの大きな２つの補給ルートをもっていたと考えられている。日本海方面からのルートは飯梨川をのぼって直接富田城下に至るコースと陸路吉田を経由して搬入するコースとがあったと考えられる。美作～伯耆方面からのルートは現在の鳥取県日野町から隣接する島根県伯太町を経由し吉田から富田城へのコースをとっていたと考えられる。このルートは尼子氏が播磨方面へ遠征した際の補給線としての役割をもっていた。しかし、尼子氏最末期になると、毛利氏によって日本海方面からの補給ルートが遮断され、このルートが富田城への補給ルートとして重視されていくこととなる。

以上のように、この周辺は尼子氏にとって軍事上、経済上の要衝として重要な位置を占めていたことが想像できる。このような状況の下、吉田にはいくかの城郭が築かれる。この中で興味深い事は、谷を挟んで北側には尼子氏のものと思われる城郭が、南側には毛利氏によって築造もしくは改修されたと思われる城郭があたかも対峙するように立地している点である。尼子氏の最末期には、美作方面からの補給ルートが重要になった事は前述のとおりだが、尼子氏にとって生命線とも言うべきこのルートとそれを遮断しようとする毛利氏との激しい攻防があったことは想像に難くない。ただし、この地での攻防は直接補給線を巡るものと考えるより、富田城開城直前の戦線が後退してからのものであると考えられる。雲伯国境の伯太要害山の攻防が補給路攻防の最後のものであり、ここでの尼子方の敗戦により、事実上このルートは消滅しており、吉田で補給線を巡る攻防の必然性がないからである。つまり、毛利氏の城郭は、補給線を失った尼子氏が戦線を下げたときの最前線



第３図　調査区配置図（１:300）

基地であったと考えられるのである。この後、補給路を失い、また、援軍の見込みのない尼子氏は急速に弱体化し、富田城は落城するのであるが、こうした時代の中で永源寺要害は築かれたものと考えられる。

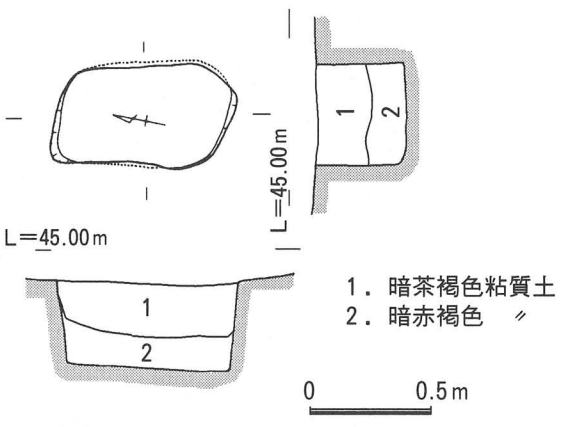


第４図　永源寺要害調査後測量図（1:200）

遺構の概要（第３～６図）　永源寺要害は、東西に延びる尾根の先端部分に所在し70ｍほどの範囲内に６ヶ所の大きな郭をもうけ、西の端には堀切を設けている。今回の調査は事業に直接かかる部分のみにおいて行った。このため要害の全体像が明らかになっているわけではないことをあらかじめ断っておく。調査区は尾根が南側に若干飛び出した形になっている部分にある。同一丘陵上には、宮谷古墳群があり、堀切より東側に何基か古墳と思われる場所が確認でき古墳の地形を利用して、山城を築いているものと考えられる。今回調査区とした部分も古墳による地形を利用して、城を築いたものと思われ、一部遺構面が重なる。

表土である腐葉土層を除去すると、一部で地山層が現れた。このため、表土層を除去した部分が要害の遺構面であると考え、この部分での精査を行った。その結果、東西６ｍ南北７ｍほどの平坦面を有し、この平坦面の中央やや東よりにピットを１基確認した。ピットは約0.8ｍ×0.4ｍの不整形な長方形を呈しており、深さ0.4ｍ程である。このほかに、目立った遺構を確認することはできなかった。また、遺物についてはこの遺構に確実に伴うものは検出できなかった。さびた板状の鉄片を採取したが、この遺構のすぐ隣の窪地状の部分に東屋が近年まであり、これに伴うものと思われる。

検出したピットは、地山層が現れた部分にあり、古墳遺構面の墳頂部と重なる部分にあたるため、確実にこの遺構面に伴うものかは断言できない。また、ピット内の堆積層は表土層に近く、こうした状況から近世のものである可能性も否定できない。

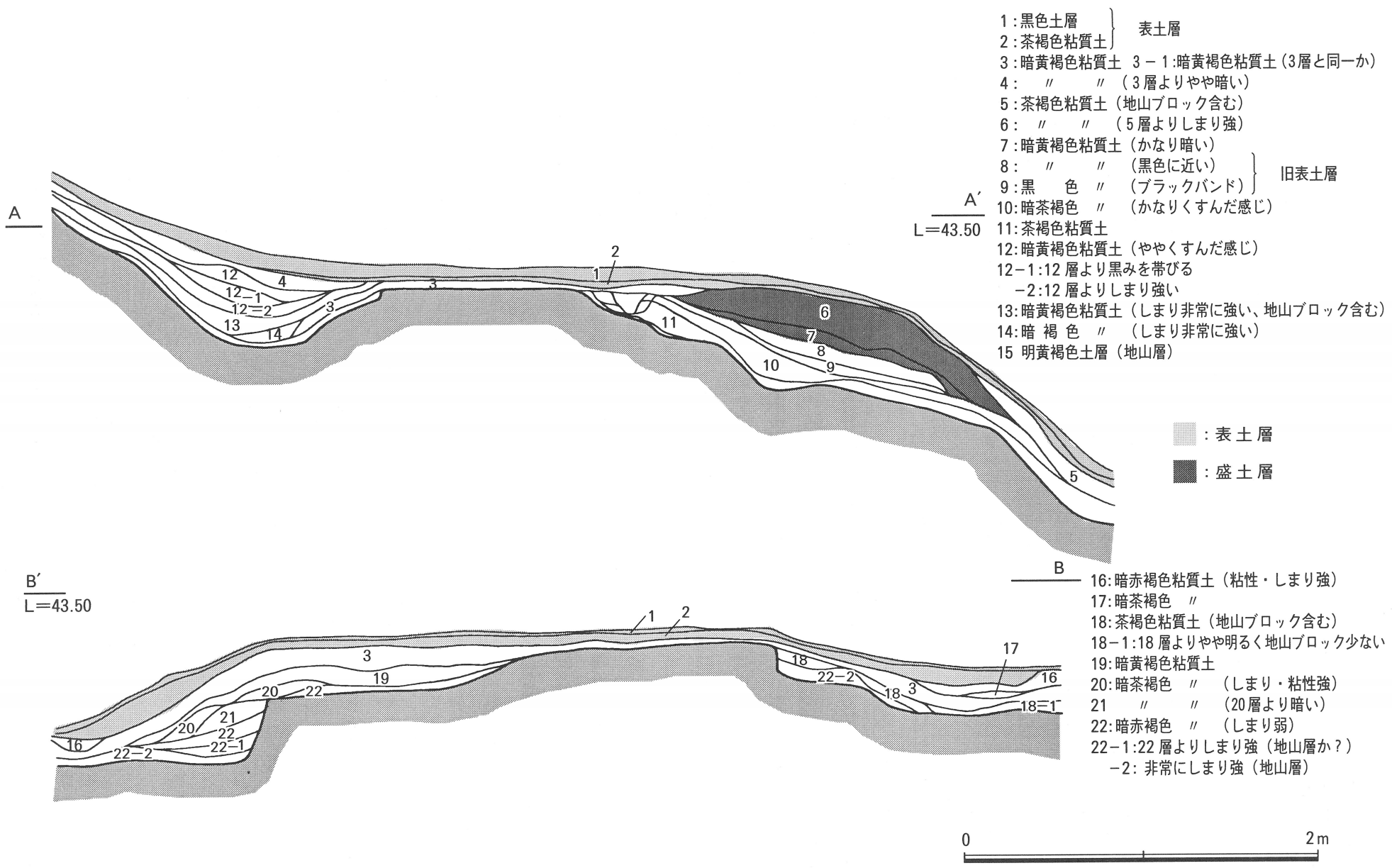


第５図　永源寺要害ピット実測図（1:30）

註 (1) 寺井　毅「尼子氏最末期の富田城について－安来市吉田を中心に－」『中世城郭研究第14号』2000

《参考文献》

本章を執筆するにあたって、上記の論文、安来市史を参考とした。また今岡稔氏に多くのご教授を頂いた。



第6図　永源寺要害・宮谷1号墳セクション実測図(1:60)

宮谷１号墳

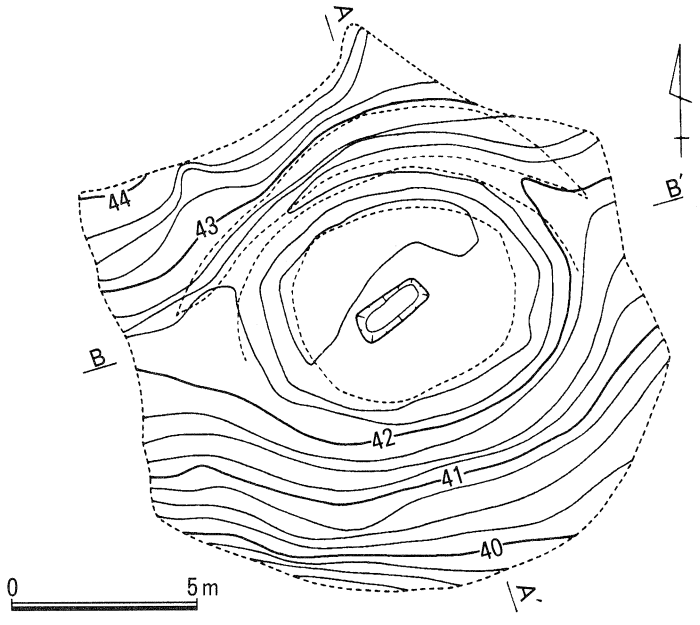
立　地　この古墳が所在する丘陵上には、この古墳を含め11基からなる宮谷古墳群がある。前述のとおり、丘陵の先端部は永源寺要害となっており、これに伴っていくつかの古墳は山城として再利用されているため、地形の改変をうけていると考えられる。この古墳もそうした古墳の一つであるが、丘陵東側の尾根上（城郭に伴う堀切以東）には原形をとどめていると思われる古墳が何基か存在する。これらを含めて、ひとつの古墳群を形成しているのが宮谷古墳群である。

当古墳は宮谷古墳群の南端、丘陵の最先端部に位置し、尾根が南に若干突出した場所に位置する。古墳の西側・南側は急斜面になっており、特に南側は後世の切削によって切り立った崖状の地形になっている。標高は墳頂部で約43ｍを測り、吉田地区の所在する谷の大部分が見通せる場所に立地している。

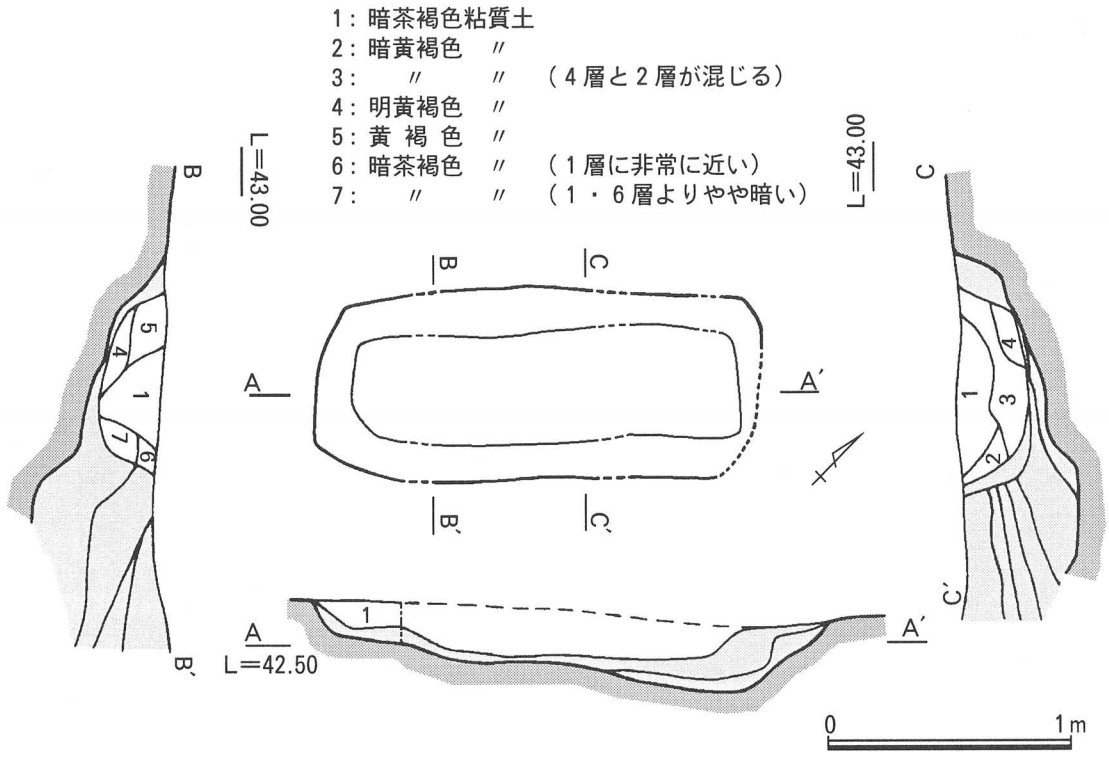
墳　丘（第６図・７図）　北側半分は地山を削りだし、南側半分は盛土によって成形している。北側は、丘陵を区切るように弧を描いて周溝が掘られており、これによってこの古墳が円墳であることが確認できた。周溝は、丘陵側で深さ約1.2m、底部の幅約0.5mを測る。墳丘の規模は、東西約10m・南北約８ｍの楕円形を呈しており、周溝側で約１ｍの高さをもつ。墳丘南端は、丘陵が切削され断崖となっている部分に続く。このため、墳端と思われる傾斜の変換点は確認できず、また墳丘の盛土が流出している可能性が高い。このため、築造当時は今回検出した形よりも真円に近い形であった可能性が考えられる。南側墳丘セクションを確認すると、ブラックバンドが斜めにはしっており、この部分が古墳築造前の旧表土層であると考えられる。このため、それより上の約１ｍ程が古墳に伴う盛土層であると考えられる。最下層の地山面には弥生時代の遺構面があり、ブラックバンドとの間に何層かの堆積が見られることから、この遺構面の埋没後に古墳が築造されたものと思われる。また、ブラックバンドは、墳頂平坦部に帯状に現れている。このことから、墳頂部は要害の遺構面により削平されている可能性が大きく、築造当時はもう少し高い墳丘をもつ古墳であったと考えられる。

主体部は墳頂部中央で１基確認できたが、遺物を伴っていない。墳丘全体からも古墳に伴うと考えられる遺物は検出できなかった。周溝内の堆積層から弥生土器を１点検出したが、この古墳に伴うものとは考えにくい。

主体部（第８図）　墳頂部のほぼ中央、地山成形の部分と盛土部分の境界上にある。地山部分は比較的すぐに検出できたが、盛土部分については非常に検出しにくい状況にあった。



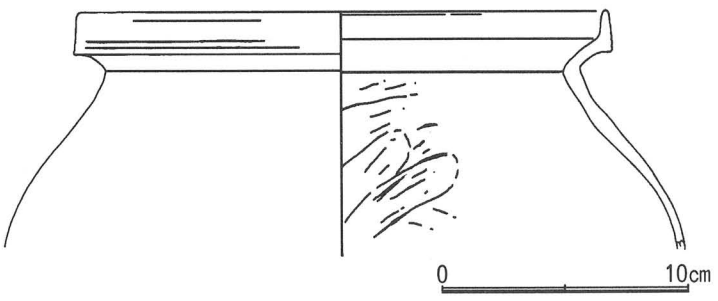
第７図　宮谷１号墳調査後測量図（1:200）



第8図　宮谷1号墳主体部実測図（1:30）

平面プランでは確認が困難であったため2ヶ所にサブトレンチを掘削し、セクションで確認しながら主体部の検出を行った。このため不整形な検出面となったが、1.8m×0.8mの隅丸長方形、深さ約0.3mと思われる素堀の墓壙が検出できた。プランの大きさに比して深さがあまりないが、墳頂部が削平されていることから当初はもっと深い墓壙であったと考えられる。また、これは推測であるが、地山の掘り込み部分に段があるように見えることから、二段墓壙の2段目であるという可能性も考えられる。主軸はN42°Eで、ほぼ北西方向に向き、丘陵尾根筋にほぼ併行している。こうしたことから、方角を指向したというより丘陵に沿った方向を指向したことが考えられる。遺物等を伴わないためどちらが頭部であったかは不明である。

遺　物（第9図）　周溝内の堆積層から出土した弥生土器である。第6図14層中から出土したもので、かなり深い位置からの検出となった。流れ込みによるものと思われるが、古墳築造後早い段階でのことと思われる。器種は甕で、口縁部から肩部にかけての約1／2が残存している。復元口径は21.6cmを測り、体部内面にはヘラ削りの跡が見られる。ほぼ垂直に立ち上がる二重口縁を持ち、4～5条の直線紋を施しているが、風化のため紋様は摩滅しておりかろうじて直線紋であることが確認できる。弥生時代後期のものである。



第9図　宮谷1号墳周溝内出土遺物実測図（1:3）

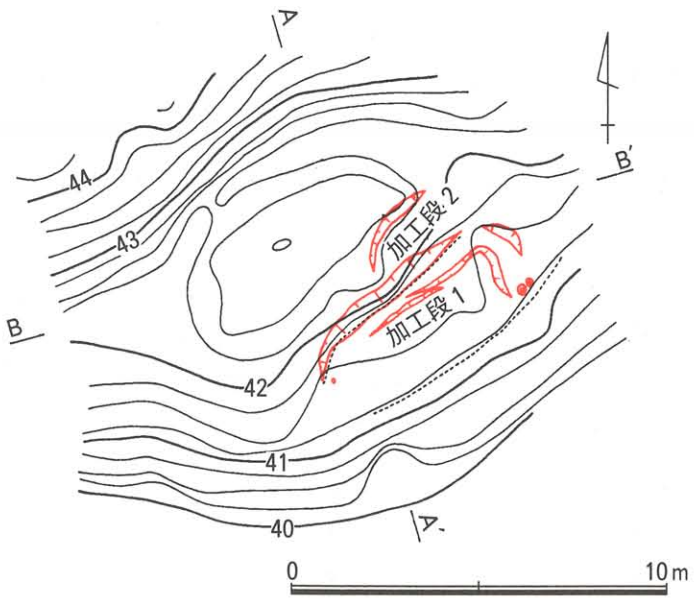
その他の遺構

加工段１・２（第11図）

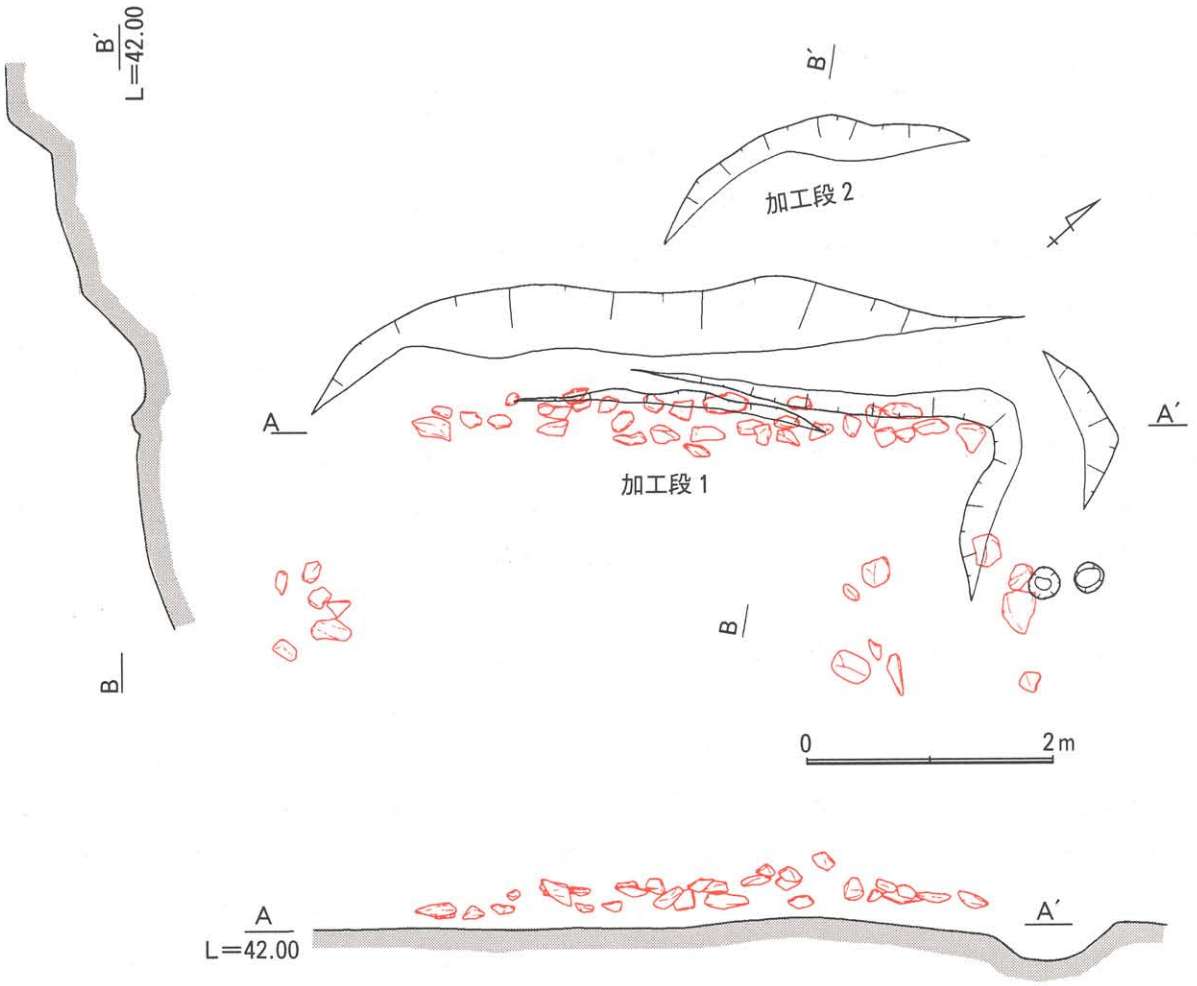
加工段１　古墳の盛土層を除去し地山面まで掘削を進めたところ、石列らしき遺構、浅い溝と若干の平坦面、ピットが確認でき、ここにもう一面遺構面が存在することが明らかになった。墳丘調査時に掘削したサブトレンチから平坦面があるらしいことが確認できたため、調査前には住居跡の可能性も考えていたが、実際の遺構は平坦面も大きな広がりを見せずまた、ピットなども確認できなかったため加工段とした。

この遺構は、東西５ｍ南北１ｍほどの平坦面を有し、壁面は0.5ｍほどの緩やかな立ち上がりを見せる。東側には壁溝と思われる溝を伴うが、西側では検出できなかった。この溝はコーナーの部分が、古墳の周溝あるいは築造時の整地によって切られていると思われる。遺構全体はコの字状の形態をもつため住居跡とも考えられたが、平坦面でのピットの検出ができなかったため、加工段とした。あるいは住居の平坦面の大部分が流失したことによるかも知れないが、現状でははっきりしない。壁溝終点部分で２基のピットが並んで現れたが、双方とも深さ0.3ｍほどの浅いものである。

壁溝上には、石列と思われる石の並びが検出できた。また、その他にも平坦面に沿うようにいくつかの石が点々と検出できたため加工段に伴うものと考えられる。石列は側壁に併行して約５ｍほどの長さでほぼ一直線に並ぶ。遺構検出面から若干浮いた位置にあり、石同士は密接に接しておらず、間に土が入り込んでいる。このような状況から、検出当初は大量の流れ込みによるものとも考えたが、幅0.5ｍ比高差0.3ｍ程の狭い範囲にまとまっていることから、何らかの人為的な意図を持って並べられたものと考えるべきであろう。古墳に伴う可能性も考えられたが、セクション中の旧表土層より下のレベルで検出され、この層を切っている形跡も認められなかったため、古墳に伴うものではない。どのような目的を持って並べられたものかは定かではないが、加工段１を竪穴住居と考えた場合、壁面ないしは床面を固めるものであるのかもしれない。あるいは、この石列のレベルまで張り床を施していた可能性も考えられるが、平坦面が流失した状態でセクションでもはっきりと確認できなかった。加工段１が住居跡でないと考える場合、この石列の意味はさらに分からなくなるが、壁溝と思われる遺構が独立した溝状遺構になる可能性が考えられる。溝の壁面を固めるためのものか、もしくは基底部の敷石であることも考えられる。いずれにせよ加工段１と、この石列は何らかの関連を持つものであると思われるが、どういう意図のもとに置かれたのかということは不明である。



第10図　宮谷１号墳盛土除去後測量図（１:200）



第11図　加工段１・２実測図（1:60）

この遺構に伴う遺物はほとんど認められないが、墳丘の盛土層中から多くの弥生土器が検出された。これらの土器の多くは、旧表土層中もしくはその下の層から検出されており、この遺構はそれらの土器と同時期のものと考えられる。

加工段２　古墳遺構面墳頂部にあたる部分に検出された遺構である。現状で、東西２ｍ･南北0.7ｍほどの小さな平坦面を有し、壁面の立ち上がりも小さく、0.3ｍほどである。壁溝、ピットの検出もできなかったため、積極的に遺構とすることはできないかも知れないが、東側は古墳周溝に削平された形になっており、壁面についても古墳・要害の遺構面に削平をうけている可能性が大きい。このため、築造時にはもう少し大きな段になっていた可能性が大きいと思われるため加工段とした。加工段１との関連も考えられ、また切り合いの可能性も考えられたが、セクションから切り合い関係は確認できなかった。ただし、この遺構を壊して加工段１を造ったということは十分に考えられるが、現状では確認できない。この遺構に伴う土器は検出できなかったが、加工段１同様、この遺構も墳丘盛土層中に含まれる遺物と同時期であると考えられる。

ＳＸ０１（第13図）

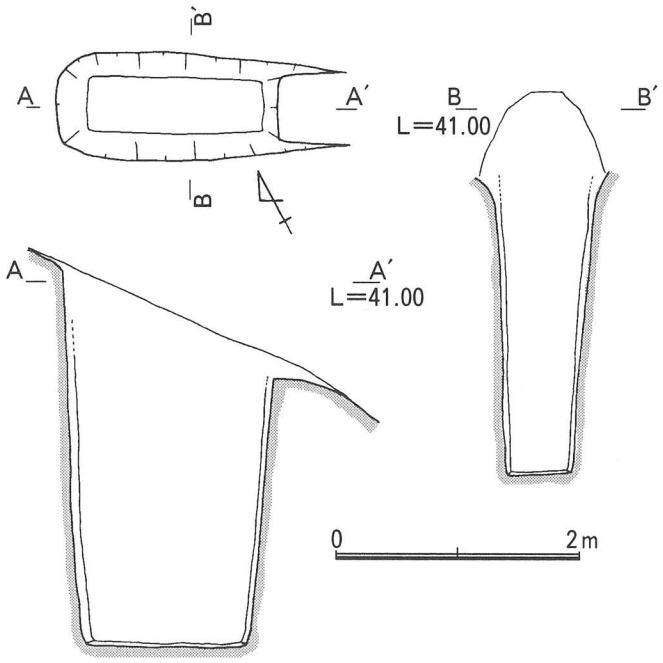
この遺構は、調査区の東約２ｍ・標高にして約１ｍほど下がった部分にある。調査前から細い窪

地状の地形をなしており、軸線上に重なるように２本の境界杭があったため土地境界のための溝のように見えた。しかし、この窪みは小さいながら横穴になる可能性も捨てきれなかったため、確認調査を行うことにした。表土を剥いで精査を行ったところ壁面は地山層が現れたが、底部では地山層が検出できなかった。このため地山層が現れるまで掘削を続けることとした。その結果、長さ約２ｍ・幅0.7ｍほどの長方形の竪穴が検出できた。この穴は、丘陵側の深いところで約３ｍ・谷側の浅いところでも約２ｍほどの深いものになった。堆積層は、はっきりと確認を行わなかったため断言はできないが、底部付近が若干地山層に近い層であった以外はほぼ単一であったという印象である。また、この層は地山層を細かくしたような土質であるように感じられ、掘削後それほど時間をおかず、再び埋められた可能性が高いように感じられた。平面積に比して深さがあり、立地も平坦地ではなく斜面にあることなどからどういう目的で掘られた穴かはっきりしない。また、遺物等も検出できなかったため時期も不明である。ただし、長方形の穴のコーナー部分はきちんと角がつけられており、人為的なものであることには間違いない。あたかもバックホウなどの重機で掘削したかのように見えるためこうした可能性も考えたが、急斜面の上に立地するため現状では重機がここまで上がってくる事は不可能である。こうしたことから人力による掘削であると考えられるが、これだけの深さの穴を掘削するにはそれなりの目的ないしは理由があったはずである。牛馬の埋葬坑、トイレ、井戸等の可能性も考えたがいずれも説得力に欠け、また時代もはっきりしないため使用方法・目的は不明である。近在の人に聞き取り調査も行ったがはっきりした解答は得られなかった。調査区内で検出された３つの遺構面との関連は、時期がはっきりしないこともあり分からないが、状況から考えると永源寺要害に伴う可能性が大きいのではないか。ただし、いずれの遺構とも関係のない近代のものである可能性も大きい。いずれにせよ時期・目的等々全く不明であり、性格不明遺構とした。

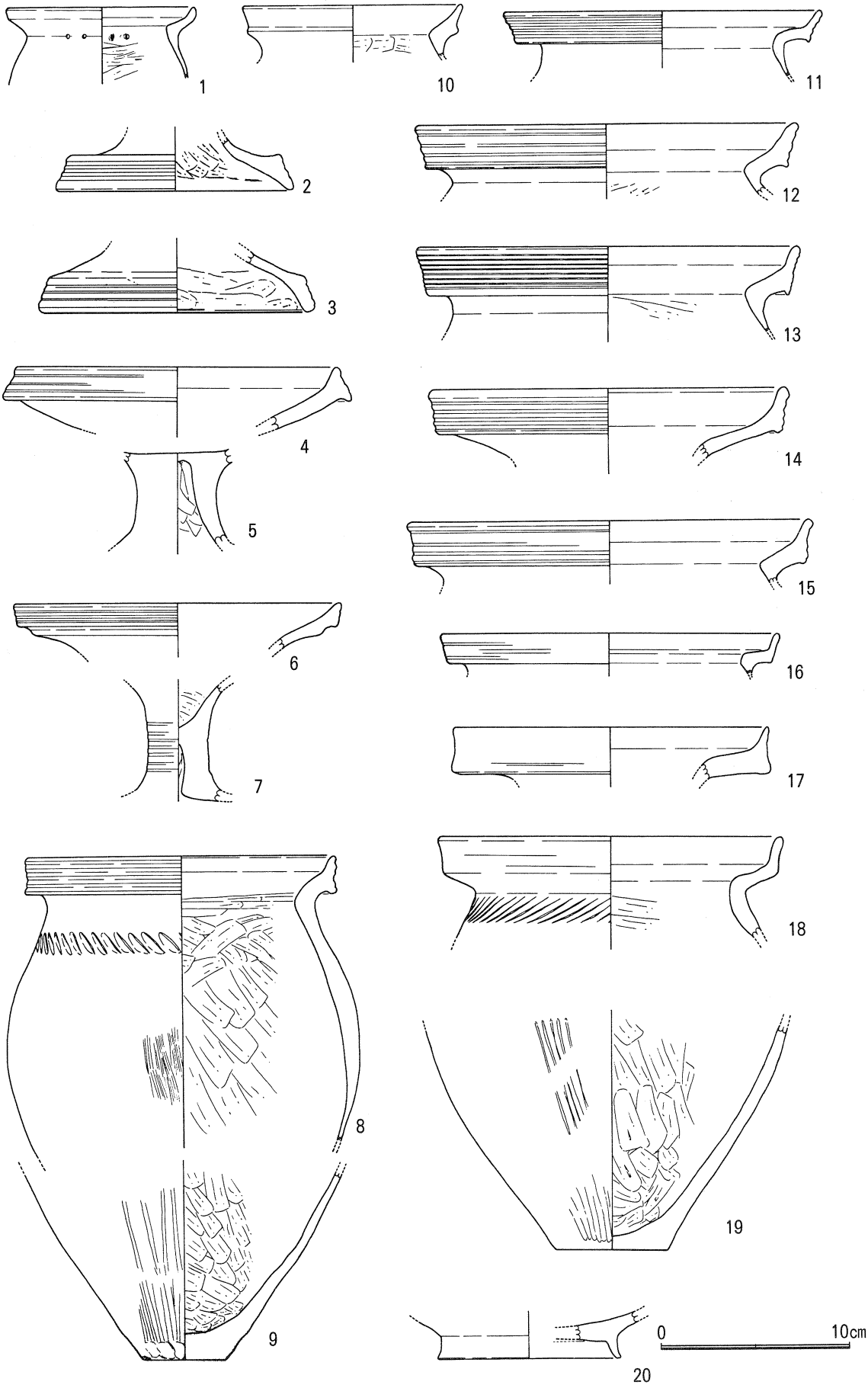
盛土中出土遺物（第12図）

１～19は弥生土器で墳丘南側土層中から出土した。多くはブラックバンドもしくはそれより下の層から出土したものである。20は須恵器で、盛土層中から出土した。

１は、壺口縁部で復元口径11㎝を測る。短く立ち上がる複合口縁を持ち内面はヘラ削りを施す。頸部に２ヶ所ずつ一対の穿孔を施しており、使用時にひも状のものを通すためのものであろうと思われる。２は、高坏の脚端部であると思われるが、壺口縁部の可能性もある。



第12図　ＳＸ０１実測図（1:60）



第13図　宮谷１号墳墳丘盛土中出土遺物実測図（1:3）

復元径は12.2cmを測り、口縁部には3条の直線紋を施す。内面にはヘラケズリの痕が端部に近いところまで認められ、外面には朱らしきものも見えることから、坏脚部であると考えた。3も同様に坏脚端部であると思われる。端部付近までヘラケズリの痕跡が見られ、外面には3条の直線紋を施す。復元径は13.8cmを測る。4は高坏口縁部である。復元径16.8cmを測る。全体に風化が激しく調整等確認できない。また、口縁端部は破損が大きく若干上方へ延びる可能性もある。5は坏脚体部である。図示中径の1／2程度が残存している。外面は風化のためはっきりしないがハケ目・朱らしきものが認められる。6・7は坏口縁部・脚部である。胎土の様子・色調が似ているため同一個体の可能性があるが断定できない。6は短く立ち上がる複合口縁を持つが、形式的な印象である。口縁部には3条の直線紋を施す。内面はナデ調整のみが認められる。7は外面に7条の直線紋と朱が認められ、内面にはケズリ調整によって仕上げている。上下が逆になる可能性もあるが調整が丁寧に仕上げられている方を坏部としている。8・9は接合ができなかったが同一個体である可能性が非常に高い。同一個体である場合、器高24cm前後になると思われる。体部上半が張り出し、小さな平底になる甕であると考えられる。復元口径は16.1cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる複合口縁を持つ。肩部にはヘラによると思われる刺突紋を施している。底部には圧痕が認められミガキと思われる調整痕も認められる。内面はヘラケズリを施している。10は甕口縁部である。復元口径11.6cmを測り、単純化した複合口縁を持つ。頸部より下の内面には、ケズリ調整が見える。11は壺もしくは甕口縁部である。わずかに外反した複合口縁を持ち復元口径は16.6cmを測る。4条の直線紋を施すが調整等は風化のため確認できなかった。12は甕口縁部である。4条の直線紋をもつ複合口縁で、口縁端部はわずかではあるが外反している様に見える。頸部よりしたにはケズリらしき痕跡が見えるが風化のためはっきりしない。13は甕口縁部である。8条の直線紋をもつ複合口縁で、復元口径20cmを測る。14は壺もしくは高坏口縁部と考えられる。復元口径18.6cmを測り、4条の直線紋を施す。内面にはナデ調整が認められる。15は甕口縁部である。わずかに口縁端部が外反しており復元口径は21.2cmを測る。内部は頸部より下にケズリらしき痕跡も認められるが、残存部分が少なくはっきりしない。16は甕口縁部である。短く立ち上がる複合口縁を持つが全体に風化が大きく、詳細な観察は困難だった。17も16同様風化が大きく詳細は分からないが甕もしくは壺口縁部であると思われる。ほぼ垂直にやや外反しながら立ち上がる複合口縁を持つ。復元口径は16.4cmである。18は甕口縁部である。全体に風化が大きく口縁部には直線紋の痕が認められるが、はっきりしない。肩部には羽状紋を施し、やや外反して立ち上がる複合口縁を持つ。19は甕もしくは壺底部である。9とよく似たプロポーションをもち、体部にハケ目が見える。また、底部には一部ミガキ痕も見える。20は須恵器坏身である。底径9.6cmほどの脚をもつもので、坏底部に静止ナデが見えたことから坏身とした。飛鳥時代のものであろう。

第4章　ま　と　め

今回調査を行った吉田地区は、市内でも調査例の少ない場所であり、また安来市が実施する城郭の調査としてはおそらくはじめての例であると思われる。このため、解明できない点や明らかになった点などいくつかの整理が必要な事項があると思われる。ここでは、今回の調査の結果をふまえ、若干の考察と問題点の整理を行いまとめとしたい。

永源寺要害について

第3章の中でもふれたが、尼子氏最末期には月山富田城の裏玄関とも言うべき吉田にも、毛利軍がなだれ込み、前線基地としていくつかの出城を築いている。このような状況の中で、永源寺要害は築かれたものと考えられる。しかし今回の調査では、調査区が全体のごく一部分に限られたこともあり、この遺跡の全体像を明らかにするには至らなかった。調査区内でも、城跡としての明確な遺構を検出することは出来ず、整地を行ったと考えられる平坦面の検出にとどまった。しかし、堀切が見られることや十分でないにしろいくつかの縄張りらしきものが確認できることから、山城である可能性は大きいと思われるが、全体の調査を行うことが出来ない限りこの遺構の性格は明らかとならないであろう。ただし、今回の調査区が城郭の一部であると考えた場合、言うことのできるいくつかの点があるのでここではそれらをまとめておきたい。

ひとつは、この遺跡は尼子氏によって築かれたものである可能性が非常に高いと言うことである。尼子の山城と毛利の山城には築造の技法に大きく差があり、浅い堀切や整地程度の非常に簡単な作りをする尼子氏に山城に対して、土塁を築くなど大がかりな技法を用いる毛利氏の山城とは対照的な作りとなっており、こうしたことから吉田に点在する城郭を眺めてもどちらのものであるかはっきりと分けることが出来る[(1)]。ただし、この築城技法の差が直接、戦略の優劣をつけるということではなく中世以来の勢力である尼子氏と新興勢力である毛利氏との時代的な差である。つまり、中世以来の築城技法を踏襲する尼子氏と新しい技法を取り入れつつ勢力を拡大していく毛利氏との差である。こうした点をふまえつつ今回の調査を眺めると非常に簡単な作りであるこの遺跡は尼子氏によるものであると考えざるを得ない。堀切の深さ、縄張りの整地などを見ても大きな工事を施した形跡は認められないためである。

もう一点は、この城が非常に臨時的な性格をもったものである可能性が高いと言うことである。毛利氏に比べて簡単な作りをする尼子氏の城といえども、この山城はあまりに作りが簡単であり縄張りの区切り方も曖昧になっている場所もある。また、規模もあまり大きくなく多くの人数が常時駐屯したといった形跡は見られないからである。今回の調査で、ピットなどの遺構や生活に伴う遺物が検出されなかったこととも考え合わせると、ごく限られた時間あるいは状況の中で築かれたものであると考えざるを得ない。

こうしたことを考え合わせると、富田城攻略時の局地的な戦闘あるいは、周辺の正福寺要害や高場要害との関連の中で臨時的な出城として築かれたと言うことも想像できる。だが、こうしたことは未だ推測の域を出ず、周辺の調査が進むことによって明らかとなるであろう。調査例の増加を待ちたいと思う。

宮谷１号墳について

まず、今回の調査で問題となる点はこの古墳の時期の問題である。古墳に伴うと考えられる明確な遺物の検出は出来ず、出土する遺物のほとんどが弥生土器であった。こうしたことから弥生墳丘墓ではないかとの指摘もあったが、墳形が円墳であると言うことや周溝の作り方などの状況証拠から古墳時代のものである可能性が高いと考え盛土除去後に結論を先送りにしつつ調査を進めた。この結果、弥生土器の出土場所が墳丘南側に偏っていること（地山削り出しの部分からほとんど検出できない）や盛土除去後、弥生土器を含む層が古墳築造前の旧表土層より下であると判明したこと、地山面に弥生時代の遺構面が検出できたことなどによりこの遺跡が古墳時代のものであると結論づけた。しかし、遺物が無いことに変わりはなくはっきりした時期については不明のままである。少なくとも前期古墳でないであろうことは想像できるが、中期のものか後期のものかははっきりしない。今後、同一丘陵上の宮谷古墳群の調査が進んだ時点で何かしらの答えが出るものと考えられ、ここでは時期について明確にはしない方が賢明であると考える。

主体部については、しっかりとした形で検出できず、筆者の実力不足を痛感させられる結果となった。かろうじてセクションでの確認は出来たが不整形で曖昧な形での検出となった。墓壙自体が浅いことから墳頂部は要害面で削平されている可能性もあり、このほかに主体部のあった可能性も否定できないが現状では、想像の域を出ない。いずれにせよ、ここからも時期の特定をすることは出来ず今後、周辺の遺跡や宮谷古墳群の他の古墳の調査が行われる際に明らかにしていきたい。

３つの遺構面の関係について

今回の調査では、三つの性格の異なる遺構面が重なるという珍しい結果となった。ここではそれらの遺構の切り合いや築造状況を考え、唯一の手がかりである弥生土器をもとにそれぞれの遺構についてまとめてみたいと思う。

言うまでもなく、最初に作られたのは最下層の加工段の遺構面である。今回検出した遺物はほとんどがこの遺構面に関わるものと考えられ、弥生時代後期のものである。この遺構面は、上２つの遺構面、特に古墳の遺構面によって削平を受けていると思われる。古墳築造時に丘陵上の地山面を掘り込んで周溝をもうけているが、この周溝によって遺構の一部が削平を受けていることは、第３章でもふれた。加工段が単独で存在したとは考えにくく、おそらく古墳築造前の丘陵上にいくつかの住居ないしは何らかの同時期の遺構があったと考えられる。古墳築造に伴う周溝の掘削はこの丘陵上の遺構も同時に削平したことが考えられ、ここが盛土中・旧表土層以上の層に含まれる土器の出土場所であったと思われる。周溝掘削によって発生した排土を古墳の盛土に使っていると考えられ、盛土層と地山層の土質は似通っている。旧表土層以下から検出された土器は、加工段に伴うか、あるいは古墳築造以前の流入によると思われるが、盛土層中のものは、この排土に紛れたものと考えられる。

古墳が築造されてから長い年月の間に周溝は徐々に埋まり、要害が築かれる頃にはかなりの部分が、埋まっていたと考えられる。しかし、墳丘は若干のマウンド状の高まりをもっていたと思われ、この部分を削平し、要害の遺構面を形成したと思われる。要害に伴う立ち上がり面が大きく手を加えられた形跡がないことから、墳頂に当たる部分の整地・削平が要害面形成の大きな部分を占めて

いたのではないかと考えられる。

以上を簡単にまとめると次のようになる

弥生時代の遺構面（住居・加工段）が作られる

↓

丘陵上の弥生遺構面を破壊して、古墳が作られる

（このとき同時に遺物が古墳の盛土中に紛れ込む）

↓

古墳墳頂部を中心に削平して山城を築く

（このとき弥生遺構面も削平された可能性がある）

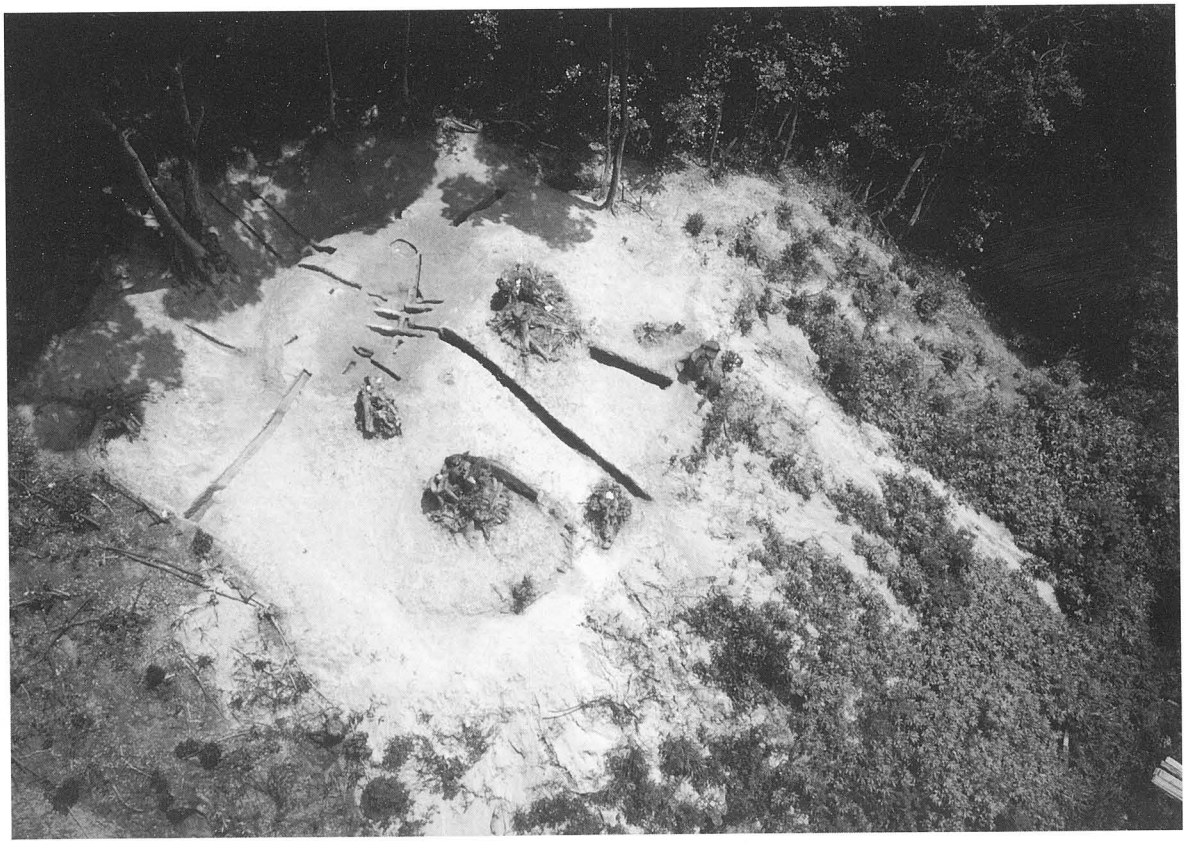
墳丘の南側半分、盛土中に遺物の出土が偏っていることから、このように考えることが自然であると思われるが、状況証拠によるものであるため確証は持てない。また、それぞれが作られる際に下の遺構面を傷つけながら進むため、遺構の性格がはっきりしないことも一因になっているのではないかと思われる。特に、古墳の時期がはっきりせず、加工段の遺溝面の性格も曖昧なことから、この２つの遺溝の関連は推測でしかない。

ともかく、こうした複数の遺構面が重なる遺跡についての調査には、慎重さが求められることを痛感し、今後の反省としたい。

註 (1) 今岡稔氏のご教示による。

図　　版

調査区遠景

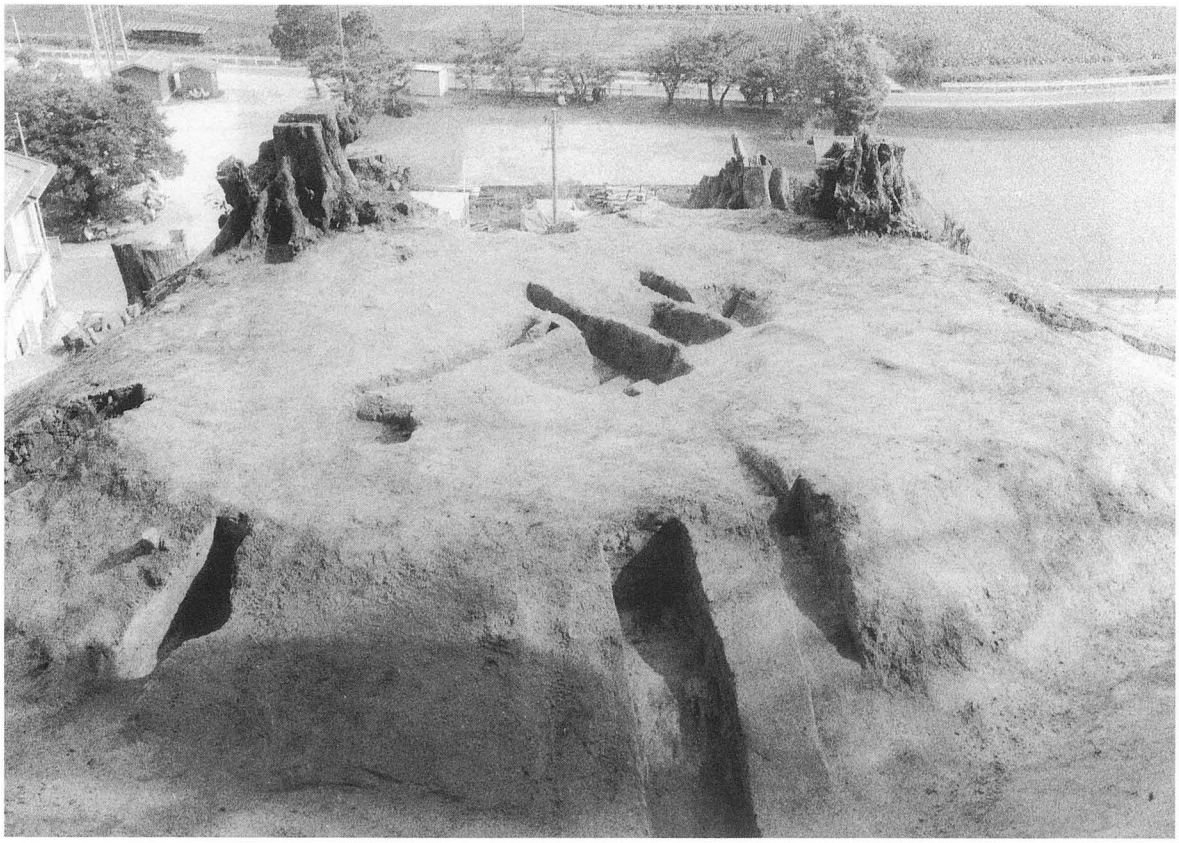


調査区全景

永源寺要害調査後風景（北から）

ピット検出状況

ピット完掘状況

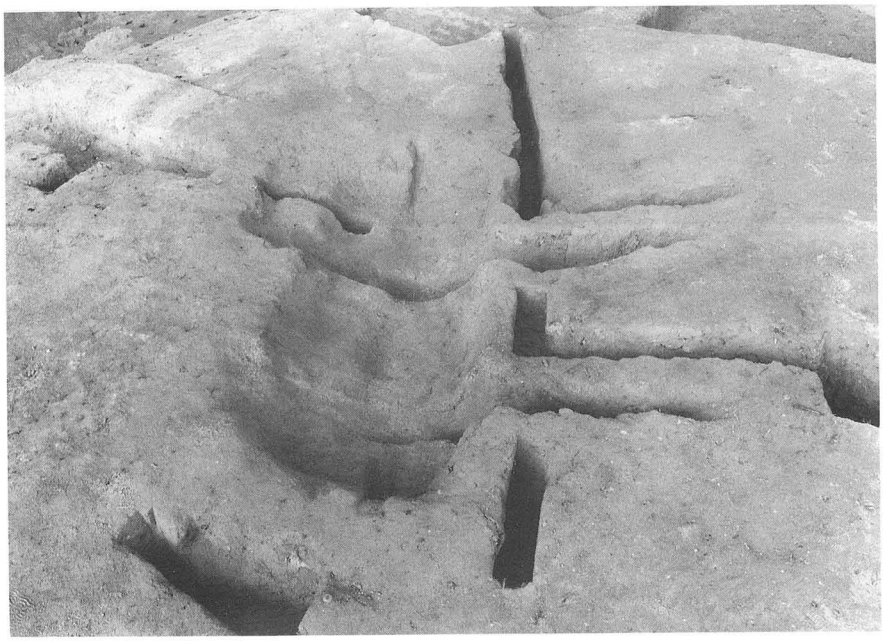


宮谷１号墳調査後全景（北から）

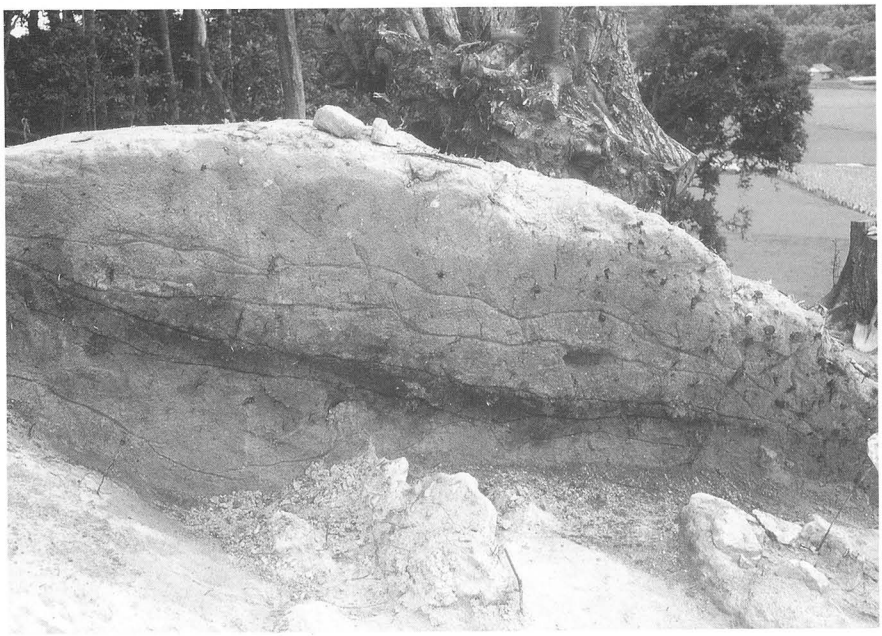
宮谷１号墳周溝検出状況

ＳＸ０１検出状況

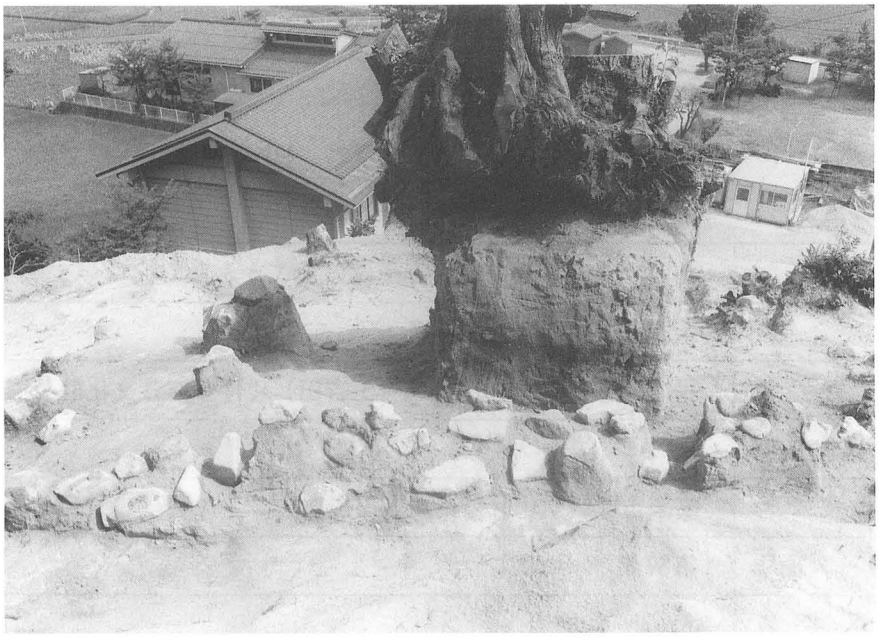
宮谷１号墳
周溝検出状況



主体部完掘後



墳丘セクション



石列検出状況
（北から）

石列検出状況
（西から）

加工段完掘後
（東から）

報告書抄録

ふりがな	えいげんじようがい・みやだに1ごうふん
書名	永源寺要害・宮谷1号墳
副書名	平成11年度復旧治山事業（上吉田）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	安来市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第37集
編集者名	大塚　充
編集機関	安来市教育委員会
所在地	〒692-0011　島根県安来市安来町874-20　　TEL　0854－22－3927
発行年月日	西暦2001年3月19日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間
永源寺要害 宮谷1号墳	島根県安来市 上吉田町	32206		35°21′42″	133°13′92″	200004 ～20001001

調査面積	200㎡	調査原因	治山事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
永源寺要害 宮谷1号墳	城跡 古墳	弥生時代 古墳時代 戦国時代	古墳 加工段	弥生土器・ 須恵器	城跡・古墳・弥生加工段の3面の遺構面を検出した

永源寺要害・宮谷1号墳　　安来市埋蔵文化財調査報告書第37集

平成11年度復旧治山事業（上吉田）に伴う埋蔵文化財調査報告書　2001年3月発行

発行 島根県松江農林振興センター・安来市教育委員会　印刷 (有)岩田印刷